

田島祇園祭の歴史に見る祭の効用

—祭を通じた人々や共同体のつながり—

遠藤 由起

日本大学大学院総合社会情報研究科

On the Capability of the Festivals in Japan

—Ties between individuals and community through Tajima Gion Festival history—

ENDO Yuki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

All over the world, people perform various rituals and festivals. In the same way, there are many festivals in various places in Japan. Numerous Japanese festivals have historically developed in conjunction with rice farming. There are capability and effect of fostering “connection” in the festivals in Japan. The ties between individuals, community and region through Japanese festivals is strongly related historically. Such a relation creates a connection with people and society through the festivals. This connection is considered to nurture the festivals even more. Inaba (2016) notes the ties through the festivals are “Social Capital” discussed by Putnam (1993).

The present study was undertaken to consider the connection between people through the festivals in Japan and the capability of the festivals. One example of the ties through the festivals in Japan is the capability and its effect of Tajima Gion Festival in Fukushima Prefecture, which can be seen from its 800-year history. How has the festival connected people and society in history? What are the benefits of the connection that the festival fosters for the reconstruction of the community, human relationships and disaster? This paper focuses on ties through the festival from the history of Tajima Gion Festival, and analyzes the capability and its effect of the traditional and contemporary festivals in Japan.

1.はじめに

現在、日本の各地ではたくさんの祭が行なわれている。祭と一言と言っても、都市の祭や地方の祭、夏祭りや秋祭り、そして伝統の祭から現代的なイベントまで、日本で行なわれている祭には様々な祭がある。これらの祭の全てが多数の観衆、あるいは創造と継承の担い手など、多くの人々の力によって支えられている。人の力なくして、祭というものは存在しないといってよい。

祭という行事を作り、継承していくのが人間の「つながり（絆）」である一方で、祭という行事が却って人間や地域社会の間における「つながり（絆）」を育んでいるともいえる。なぜならば、祭は日常とは異なる「非日常」の時間と空間を生み出す。そのこと

で普段とは逆転した人間関係が演じられ、祭を通じて社会的距離が縮められた人々の中の「つながり、絆」が形成される。ターナー、リーチらは祭によって一時的ではあっても日常の社会的距離を相対化することで安定的に維持することが可能になる、としている（リーチ 1961, ターナー 1969）。また、祭は行事の開催時期だけのものではなく、開催地域の人々だけのものでもない。そのような意味では、多数の人を集めなければ成功とはみなされないようなイベントとしての祭は大きなリスクもはらんでいる。しかし、例えば伝統ある多くの祭の歴史を見ると、幾度となく祭開催の中断を余儀なくされながらも、地域住民や祭を支える人々の手によってその度に復興を遂げ、人々や社会の絆をも更新している点が見

受けられる。このような人々や社会における絆は、「ソーシャル・キャピタル」(パットナム 1993)と呼ばれ、改めて現代社会や非常時における重要性が見直されている。祭のみならず、社会的な絆がある場合には「ソーシャル・サポート」と言われる人々相互の社会的な援助行動、支援活動が比較的容易に実施されやすい。そのサポート体制は、人々の心身の健康に大きな影響を及ぼすといわれる(トリアンディス 2002)。またアルドリッチはソーシャル・キャピタルを議題に乗せることで、政策とともにさらに高いレジリエンスを持つコミュニティを育てることが可能だとしている(アルドリッチ 2015)。

以上を踏まえ本稿では、田島祇園祭を中心事例に祭を通した「つながり、絆」についてソーシャル・キャピタルという概念を援用し、そのソーシャル・キャピタルとそれを育む祭の効用について考察する。田島祇園祭については最初にその歴史的経緯を辿る。加えて、田島祇園祭でのフィールド調査において行なった現代の田島祇園祭を支える人たちの日常の実践に関する調査と人々との対話をもとに、祭と祭を通したつながりの持つ効用や可能性について明らかにしたい。

2. 田島祇園祭の成立

—田島祇園祭の成立と統治の関係

京都市では毎年7月、およそ1ヶ月にわたって夏の代表的な日本の都市祭礼の一つである「京都祇園祭」が開催される。この夏祭りは970年の祇園御霊会に起源を持ち、以降1000年以上続いてきた日本有数の古い祭の一つである¹。2009年にはユネスコの世界無形文化遺産に登録され²、祭のハイライトともいえる「山鉦巡行」³だけでも例年、世界中からおおよそ180万人の観光客が訪れる⁴。京都八坂神社が主催する御神事とともに、地元の京都をはじめとして日本の各地や様々な地域から多くの人々が集まってこの都市祭礼を作り、支えている。

福島県の会津南部にある南会津町では、例年7月22日から24日までの3日間、「田島祇園祭」が行なわれる。この祭は800年余りの歴史を有し、その起源は鎌倉時代初期、文治年間の1185年に遡るとされる⁵。この時代に南会津町を含む南山地方⁶を統治

していたのは、源頼朝からその任を受けた長沼五郎宗政(推定1162~1241)⁷であった。南会津町の田出宇賀神社が所有する「神社書上帳」によると、享和3(1803)年に領主宗政が「牛頭天王須佐之男命」をこの地に観請したとされている⁸。京都祇園祭の神事を行なう八坂神社には「牛頭天王須佐之男命」が祀られている。京都祇園祭をはじめとして各地の祇園祭では、その牛頭天王須佐之男命⁹の力に厄除や御利益を祈願し、祭礼や神事を執り行ってきた。宗政は自らの代で長沼姓を名乗っているが、出自はもと小山氏の系譜である。小山氏は同族神としてこの牛頭天王須佐之男命を信仰してきた。宗政も南山地方の統治にあたって、本所地の下野国結城市より小山氏の氏神である牛頭天王須佐之男命をこの地に観請したとされている¹⁰。

この南山地方の一部であった田島地域(現南会津町)には、在来の田の神である「田出宇賀明神」が祀られ、信仰されていた。宗政は在来の田出宇賀大明神を移し¹¹観請した同族神の牛頭天王須佐之男命と共同で祀った。このことは、長沼氏の氏神である牛頭天王須佐之男命と、領地の在来神たる田の神・田出宇賀明神への信仰の結合、調和を意味する。それはまた、共同祭祀を通して領主と領民の融和を図ることも意味していた¹²。ゆえに、後に現在の田出宇賀神社境内には在来神の田出宇賀明神と、長沼氏の氏神たる牛頭天王須佐之男命が共同で祀られることになり、祭礼の共同祭祀化が進められていった。現在、田出宇賀神社には牛頭天王須佐之男命と田出宇賀明神こと宇迦御魂神(倉稲魂神)が祀られている。田島祇園祭を見ると、在来神の田出宇賀神社の祭礼と、宗政が招来した牛頭天王須佐之男命の都市祭礼である祇園祭が重層的な構造を成していることがわかる¹³。それは、在来神と領主の招聘した氏神との共同と融和の結果であり、宗政がこの祇園祭に対して熱心に力を注いでいたことを示している。

3. 田島祇園祭の歴史的経緯

—中世の再興願、戦後の復興と地域の人々

田島祇園祭が成立した背景には、南山地方の領主となった長沼宗政の南山統治と長沼家の氏神として

の牛頭天王須佐之男命の観請があった。そのため、都市祭礼の京都祇園祭の成立と発達とは必ずと事情が異なっていた。平安時代にその起源を持つ京都祇園祭は、都市祭礼の代表的な祭の一つである。その成立当初、京都という大都市では疫病が蔓延していた。京都の人々はその原因を、京都の地で戦没していった死者の怨霊や外国から渡来した疫神、ことに牛頭天王須佐之男命のような荒ぶる神の仕業と考えた。なんとかして疫病の流行を止めようと、人々は神泉苑で「御霊会」を修め、御神饌をお供えした。こうして怨霊を慰め、疫神に厄病退散を祈願したのが祇園祭の始まりとされる¹⁴。疫病の流行とそれに対する人々の恐怖は、医療の発達した現代には想像もつかないほど大きかっただろう。京都は人が集積する大都市であったから、疫病の蔓延に対しては特に敏感になり、早くからその対策に講じようと努めた¹⁵。その対策法の一つが、京都御霊会こと後の祇園祭であった。疫病や災厄を免れようと信仰が起こるのは自然の成り行きであった。それはまた日本のみならず、世界中に共通の現象でもある。日本に目を向けると、鎌倉時代中期には全国的に都市化が進み、疫病が蔓延し始めた。そこで疫病厄除を願って牛頭天王須佐之男命を観請し、各地で祇園祭が行なわれるようになったという¹⁶。

田島祇園祭の経緯には、この鎌倉時代中期以降の各地の祇園祭の発達と重なるところもある。町では6月に城下町において、農耕に不可欠な「馬」を売買する「馬市」が開かれ、領主が勧請した牛頭天王須佐之男命がこの市の市神としても祀られた。「馬市」では近郷近在から馬を鑑定する「伯楽」や多くの人々が集まり、賑わいを見せていたとされる¹⁷。その馬市が開かれていた際、市の神である牛頭天王須佐之男命を祀って祇園祭が開かれていたとされ、その祭に集まる人出が馬市を一層賑やかなものにした。祭と市の主客関係がはっきりしないが、市の神として牛頭天王須佐之男命が祀られるのは極めて特殊である。そのため領主がこの地に勧請した牛頭天王須佐之男命の祇園祭が先にあり、祭に付随して馬市があったと考えられる¹⁸。やがて祇園祭の宗政の玄孫にあたる盛実の代には盛実の寄進で神輿が造られ、長沼家所蔵の「長器（長刀）」も貸し出された。

そしてこの頃には、京都祇園祭を模した祭礼格式が整えられたといわれる¹⁹。

特筆すべきは、長沼氏は内政において馬市と祇園祭を奨励し一族がこれに尽力していたこと、また家臣との内紛についての記録や伝承が認められない点であろう²⁰。前節で述べたように、祇園祭の奨励には、その祭神である牛頭天王須佐之男命の信仰による長沼氏一族の結束強化と共に、外来の領主と在来の領民が調和し、領民も長沼氏の統治に寄与する一面があった。この祇園祭の奨励は結果的に長沼氏の南山地域統治に大きく働いたのであるが、400年余り続いた長沼氏の統治時代もやがて終わりを迎える時がやって来る。会津を治めていた蘆名氏が伊達政宗に滅ぼされると、伊達氏が会津に移って勢力を伸長させようとした。しかし政宗も時の権力者豊臣秀吉に敗れ米沢に移るとともに、それに従って伊達側にあった長沼氏も仙台へと移り、南山地方を去った。長沼氏の統治時代に成立し、発展してきた田島祇園祭がここに14年の中断を余儀なくされることになったのである。

豊臣秀吉の命により会津を治めた蒲生氏郷は、小倉作左衛門に鳴山城を与えた。新たな鳴山城主に対し慶長8（1603）年、田島祇園祭の中断を惜しんでいた長沼氏ゆかりの者たちが祭の再興を願い出た。『田島祇園祭再興願』²¹には、家臣の連名で田島祇園祭の途絶を惜しみ、再開を許可してほしいという訴えが記されている。この訴えに対して、城代は「長刀」の使用を除き、他は旧来の形式と変わることなく祭の再開を許可している。このように田島祇園祭の発展には、地域の権力者である領主の影響が大きかった。また中世の激動の情勢と祭には深い関わりがありその中で祭が続いてきたといえる。さらに、この慶長8年は徳川家康が将軍になった年であり、中世から近世へと転換していった節目の時期でもあった²²。

近世に入ると、町は宿場町として次第に発展していった。領主から復興が許されると、田島祇園祭は中世の時代の領主の力による保護と発展から、村人自身の力で維持と継承が図られていくようになった。民家は街道に沿って宿場町らしく、横並びに整えられた。中世の縦構造は近世には、宿場町の横構造に

改められた。宿場町に住む町衆と祭の関わり方も、徐々に町民主体で担うものになっていったのである。

昭和56(1981)年、田島祇園祭は国の重要無形民俗文化財に登録された。その登録事項は祭の有する伝統的な形式とともに、町民による「お党屋制度」による維持が認められる点であった。「お党屋制度」には、「党屋」「頭屋」などいろいろな字があてられるが、田島祇園祭では「お党屋」という表現を用いている。「とうや制」とは、一年交代制で祭を当番制で担う司祭者夫妻と、その家を含む地区の区割りにあたる「お党屋組」の人たちが、共同で祭を行なう仕組みをいう。この「お党屋制度」の起源は、長沼氏の牛頭天王須佐之男命の招来に始まった祇園祭の形式ではなく、それ以前から存在していた在来の神の「田出宇賀の神」の祭祀にみられた「とうや制」に求められるともいわれる。それが祇園祭の発展とともに整備され、慶長の再興によって「町方の祭」として継承されたといわれている²³。

江戸時代中期の「祭礼大略図」には、風流な鉦車や曳山が行列で町を練り歩いた様子が描かれている。現在でも七行器行列などには女性の着物のみならず、当時から非常に高価であった藍染の袴が伝統の装束であり、男性がこれを身に着ける。町が繁栄しないところのような豪華な祭は行なうことができない。町の繁栄に伴って、かつては領主の庇護のもとに展開してきた祇園祭が、町人自身の手で行なわれるよう変化していったのである。この変化に従って祭を担う「お党屋制度」も整い、継承されてきたといえる。田島祇園祭はその成立当初から地域の祭として始まり、地縁的な仲間意識が強いことが一つの特徴とされる²⁴。他方この「お党屋制度」は現在、自分たちのつながりを基に様々な地域の人々が祭に参加することを可能にするネットワークを築いている。お党屋組を中心にして、地域の人々や各地域からの参加者が協力して祭を行なっていくことは、祭を通して多くの人々が精神的に強いつながりを醸成することにも役立っている。というのもお党屋組の中でも、若い世代では地元を離れて暮らす人たちが増えている。またインターネットを始め、様々な媒体を通して田島祇園祭を発信できる現代では、日本全国

や世界の各地から、観光客や参加者を募ることができる。彼らは祭の時期あるいは、現役を退いて故郷に帰ってきた時などに、祭という共有の文化資本、目標の下に結集する。そのような結びつきを支え、育み、新しいつながりを築いていく基本的な場所は、継承と改善を図り、世代と構成を変えて続いてきた「お党屋組」という制度とそのつながりに他ならないからである。町の人々は祇園祭を自分たちの祭として関心を持ち、改善すべきところに変容を加えてきた。この「お党屋制度」があることで、祭に対する関心と信仰が持続され、祭は町の人たちの生活の基準ともなり得る。町の人たちの生活はその頂点として年に一度の祇園祭に集約される。そしてその高揚と祭を通した人々のつながりは、次の年の祇園祭に向けて継承され続ける。祭とお党屋組を通したつながりによって、時代や地域を越え人々はある意味では祭という文化資本の当事者になっているといえる。

明治の開国と文明開化により、日本中の近代化が推し進められた。田島祇園祭もその波を受けずにはいられなかった。まず、太陰暦から現行の太陽暦に改められた。それに伴い祭日の変更された。また、それまでは別の日に行なわれていた熊野神社の祭礼を、祇園祭と合流させた。熊野神社の神輿が増え、お党屋本も田出宇賀神社と熊野神社の二家が務めるようになった²⁵。それでも祭祀の内容に大きな変更はなく、中世に成立以来の祭礼格式はその伝統の多くを維持された。

昭和に入り、第二次世界大戦を迎えると、米の統制が厳しくなったことで「神人共食」という祭の中の最重要行事の一つが中止される事態になった。別名「濁酒(どぶろく)祭」ともいわれるこの祭では、祭の時期だけ特別に許可を得た自家製の濁酒が振舞われ、それを楽しみに全国から人々が押し寄せるほどである。その濁酒も制限されて、祭は本来の盛り上がりを欠いた²⁶。人々は神社をはじめとする信仰基盤も失うかに見えたが、昭和26(1951)年には神社の維持と祇園祭の執行を目指し、氏子による「産土奉賛会」が結成された。町では「観光協会」も発足し、祭は観光事業の一つとしても運営の道が開か

れることになった。戦後の数年を経て、ようやく伝統の田島祇園祭の運営は軌道に乗ったのであった²⁷。

田島祇園祭は中世期の領主の保護と奨励によってハレの日の行事として始まり、近世期には町人の手による祭へと成長を遂げ、いまや継承すべき文化資本、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を育む行事になった。このように祭は時代とともに必要な変容を重ねながら、800年余りの歴史を長らえてきたのであった。祭という文化は時代の波にさらされる一方で、必ず人々とともにある。祭は「人々の営みそのものであり、祭は人々が集まってする実践としてあった」（俵木 2009）ということである。祭に不可欠なのは、何を置いても人の力であろう。例えば「神輿は人の手がなければ担げない」（吉村 2015）のである。そしていつの時代にも、どんな場所であっても、様々な人々の間の垣根を越えた「つながり」が祭を支えている。一方で、祭もまた人々や共同体の間の「つながり」を新たに作りかえ、社会問題やリスクに対してある一定の役割を果たすことになったといえるのである。

4. 田島祇園祭の効用と地域力

次に、社会において祭が果たす役割に関し「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」としての祭について考察する。

これまで概観してきた田島祇園祭の歴史からわかるのは、非日常の行事である地域の祭が、共同体の人々の日常生活と密接に関連し続けてきたことである。殊に田島祇園祭においては、祭と信仰が人々の生活の基準と支柱になっているともいわれる。このような日常と密接につながる祭に対する関心の深さは、住民自身が主体となって当番を決め、共同で神祭りを行なう「お党屋制度」にあるといえる。この「お党屋制度」自体、時代とともに大きな変容を遂げてきた。神祭りの運営と御神事を中心となって担う「お党屋本」と、「お党屋本」を中心に構成される「お党屋組」の人たちは、経済的にも時間的にも負担が大きい。現在の田島祇園祭では「お党屋本」というよりも「お党屋組」が主体となって動いているといわれる。しかしながら祭の「お党屋本」を何代にもわたって務めることは、地域の人にとっては

大変な荣誉と受け止められている。選定方法を固定せず、かといって過去の習慣にも縛られず、時代に即して対応させてきたことが、この制度を維持してきた一つの大きな要因と考えられる。今後も祭のお党屋制度は、時代に沿ってより柔軟に適応していく可能性を持っている。

祭が持つ効用と役割をパットナム（1993）のいう「ソーシャル・キャピタル」（社会関係資本）という視点から捉え直してみるなら、祭という非日常によって日常の社会的距離が縮められた「つながり」が育まれるという点が特筆される。稲葉（2016）は「ソーシャル・キャピタル」を「人と人の間の絆」とし、祭はこのような「ソーシャル・キャピタル」を醸成すると論じている。そして「空間を共有する準備仲間や外部者たちとの何とも言えない一体感や連帯感」を作り出すことができるのが祭だという。

「ソーシャル・キャピタル」を醸成する祭という概念を援用すると、田島祇園祭においてこのような「ソーシャル・キャピタル」を作り出すのは、この祭に特異的な「お党屋制度」によるところが大きいといえるだろう。祭は人のみならず、神と人、人と地域共同体をも結びつける。そのような結びつきこそが、祭を通したソーシャル・キャピタルとしての「つながり、絆」である。そして田島祇園祭の歴史において中心的にこの「つながり、絆」を形成する仲介役を担ってきたのが、他ならぬ「お党屋本とお党屋組（の人たち）」であった。「お党屋制度」が存続してきたことで町の人々の祭への関心と、継承に必要な柔軟な変容を損なうことなく、祭は800年以上の間続いてきたといえるだろう。

柳川（1971）は自身の調査で、田島祇園祭は「坪の各地域を大きく統合」させ、お党屋組がその統合や結束に「重要な役割を果たす」と観察している。そして「組の仲間になるものは、古くから田島の人であるかどうかは関係しない」、つまり祭という目的のために地域や年齢などを越えて、どんな人でも祭を担う仲間になれる外部への開放性があること、さらには非日常の中でこそ生まれる連帯感があることを示唆している。

田島祇園祭においても、また日本の多くの祭についても、長い歴史を有する祭であればあるほど幾度

もの中止や断絶の危機があった。例えば日本の代表的な都市祭礼の一つである京都祇園祭も、第二次世界大戦をはじめとして人々がその生存を脅かされるような時期には、祭の開催や継続に困難さを極めてきたが、その度に危機を乗り越えてきた経緯が認められる。田島祇園祭史上では、先に見たように中世時代の領主の退去によってその守護者を失ったことで、大きな断絶を迎えた時期があった。しかし、地域の人々は10年余の断絶を得てなお祭を求めたのであった。領主に出された祭の「復興願」が人々の熱意と懇願ぶりを表わしている。祭を復活させたい理由には祭の賑わい、華やかさ、経済面での効果などいくつかの要因が考えられる。本稿では人々が祭を求めてやまなかった大きな要因の一つに、祭を通じて育まれる「つながり」と、祭の文化的価値に焦点を当てたい。田島祇園祭においては「お党屋制度」が存続してきたことで、人々の日常生活と非日常の祭がある意味では強固に接続し得たと考えられる。日本の人々は祭ならではの「つながり」や「絆」であるところのソーシャル・キャピタルを育み、毎年祭を実施することでそのソーシャル・キャピタルをよみがえらせ、日常生活に取り込んできたといえる。日本における祭は、社会的生産物の中心的な作物である米と密接に関連して発達してきた。稲作が日本に伝わった古来より、社会的生産物の中心であり続けてきた米は、日本人や日本社会にとっては特別な価値や位置づけを有するものであった。日本の各地で稲作に関する農耕儀礼、豊作祈願が行なわれてきた。これらの祭祀儀礼は非日常の空間や時間として人々の生活に活力とリズムを与え、ハレの日の行事として一定の役割を果たしてきたのである。その点は田島祇園祭においてもその歴史的経緯から見出すことができる。

祭を通して育まれる人々や社会共同体の間の「つながり、絆」は、社会の危機的状況や自然災害からの復興と復旧にも、社会的な支援、すなわちソーシャル・サポートを比較的容易に提供することを可能にするのではないだろうか。なぜならば、祭を通じた「つながり、絆」すなわちソーシャル・キャピタルは地域や年齢、性別、社会的な距離や差異をはじめから超えたところに成立しているからである。祭

に見られるこのようなソーシャル・キャピタルは、他のつながりや結びつきには見られない特徴であろう。しかもそれが祭とその伝統を支え、長い間続けられる可能性が高いというのも重要な点である。

祭が「つながり、絆」というソーシャル・キャピタルを醸成することは、世界中の祭や祭祀儀礼に普遍的といえる。人々が祭を自分たちの心のよりどころにしたり、祭が信仰と結びついている点でも共通している。田島祇園祭においては、そのようなつながりすなわち祭のソーシャル・キャピタルを育むために大きな役割を果たしてきたのが「お党屋制度」であった。この「お党屋制度」によって、町の人々は祭のソーシャル・キャピタルを日常生活へと接続させてきたといえるだろう。人々は祭によって自分たちの生活や地域共同体をも、新たによみがえらせてきた。祭を再興し復興させることを原動力に、人々は祭存続の危機と同様に、様々の社会的な危機や災害を乗り越えてきたのであった。非日常でありながら人々の営みの反映である祭は、人々や地域共同体との結びつき、何かの時には距離や差異をこえてつながることができるという効用をもつものだからである。この祭を通じたつながり＝ソーシャル・キャピタルはまた、祭という文化資本と同様、人々や社会がつながり続ける中で必要な変容を遂げ、継承されていくものである。

5. 祭と人との「つながり、絆」 —現代の田島祇園祭を支える人々の 実践と対話から

永田は、「社会がその成員の関心事として存続するということは、社会の連帯が確立しているということである」とし、また「社会の連帯を強める機能を、儀礼やお祭りが果たす」としている（永田2003）。俵木は祭を「共同体の成員間の交流を図る」ものとした上で、「その祭に参加する人がみな、その目的や意義を共有しているわけではない。（略）複合的な祭に巻き込まれているというのが真実に近い。そのために祭について語る内容もまた多様である」としている（俵木2009）。

柳川啓一は田島祇園祭を調査・観察し、つながりとしてのこの祭が町の各地域を統合する働きをして

いることを示した(4章参照)。柳川の調査は1970年ごろ実施されたものであったが、つながりとしての田島祇園祭の役割については現在でも同じ働きを果たしているといえる。筆者はこの地域に生まれて現在も居住しており、2018年から2020年にかけて田島祇園祭²⁸でのフィールド調査を実施した。本章ではフィールド調査から明らかになった人々の実践と、現在の祭を支えるお党屋組を中心にした人々への聴き取りから、祭と人とのつながりすなわち祭を通したソーシャル・キャピタルについて分析と考察を試みたい。

田島祇園祭は現在も、大部分が慶長年間に定められた格式を踏襲した形で実施されている。特に禁忌事項は厳しく定められており、それらの禁忌を守るとは祭の重要事項でもある。現在でもお党屋本は卵や肉食の禁忌を守り、死者が出た家についても相応のしきたりを守って行事が進められることになっている。先の柳川も述べているように、お党屋組に入る人たちは現在ではより多様化し、重層的な結びつき方で祭に参加し支えている。

・日本の各地、海外からの参加者たち

筆者の調査では、たまたま旅行でこの町を訪れて町が気に入ったことからお党屋組に加わった東京在住のご夫婦や、町が主催した他のイベントに参加したことがきっかけで、田島祇園祭の運営にも加わるようになった東京在住の人たちなどと話をすることができた。海外からの参加者は何日にも渡る祭の準備に加わるのが容易ではないために祭当日の行列に加わる人が多く、こちらは町のホームページで参加者を募っている。祭の行列に参加した海外の人たちの多くが中世の日本の面影をとどめる祭や衣装などに感嘆し、いい体験ができたことと喜ぶことがほとんどである。近年は海外から「観客＝見る者」として参加している人たちが急激に増えている。その出身地域と世代は実に様々である。また日本各地からの観客は福島県や南会津町にゆかりのある人も多いものの、いわゆる「祭好き」な人で、日本中の祭という祭を渡り歩いている祭フリークさんも見受けられる。お党屋組に加わり祭の一連の行事を一緒に担う人々には、先にあげた東京在住の方たちの他にも福島の他の地域、例えば郡山市や福島市などから、

祭の県内での知名度もあつてか親戚筋などではなく参加する人が多い。このような人たちは、毎年祭の時期や行事の度に都合をつけて手伝いに来る。当然ながら金銭的な報酬が出るものではないが、同じお党屋組に加わり続けている人などは、期間をあけてもその人の役割が決まっていたりする。各人が、それぞれ例年の祭で受け継いできたことや、普段の生活で身につけている技などを発揮し、年に一度のハレの祭に奉仕することをいわば自然に行なっている様子が認められる。

・お党屋組と組の人たち

4章では現代のお党屋制度においては、お党屋本よりも「お党屋組」が中心になってきているものの、他方でお党屋本を務めることはその家にとっては大きな荣誉であるという意識が共有されている、と述べた。その点については筆者のフィールド調査でもいくつか認められた。お党屋本が一つの荣誉になるのは、様々な面での大きな負担を担いうるということと、加えて祭の伝統やしきたりを継承していく自負と責任の重さがあるためだと思われた。例えば、前年のお党屋本では、お膳の献立を忠実に受け継いで作っていく作業に尽力する様子が窺われたが、同じことが今年のお党屋本でも認められた。特に、年配のお党屋本ほどその責任の重さがのしかかっているように見受けられた。この献立についても、慶長の式書から踏襲されているものが多いといわれている²⁹。変容が容易なのは作る人の微妙な味付けと、準備される数である。お党屋本からはこの献立に祭のお供えとしての重要な意味があるので簡単には変えられないこと、一度に招待できる人数は数年前からは減ってきているが、準備する料理の量や質は決して落とせない、という話を伺った。それだけ祭の料理に関しては、非常に手間と暇がかかるということでもある。ただし、現代ならではの簡素化も見られる。かつては栽培をしたり採集してきた材料が、今ではスーパーで手に入る時代になった。魚から取っていただいても、加工された調味料で賄える。現代は組の女性たちのほとんどが家の外の職業に就いている時代である。自営業などでない限りは、祭のために休日を何日もとれる人は多くない。近くに住んでいても祭のことは何も知らなかったが、次第

に手伝いを通して理解しながら祭に参加しているという人、また自分の家族や子供の介護や世話に追われながら、組の手伝いをしているという人も多かった。そのような中で祭の準備は進められる。ある組では役割分担が決まっていて、お党屋本を中心に慣れた手順で準備を進めていく。一方で、今年初めて参加した若い人も多く、手探りで進めながら、新しいやり方をうまくとり入れて最後にはうまくまとまっていく組もある。お党屋組と参加する人たちによって、それぞれの祭の支え方、あり方が見られた。

・祭の伝統と変容

筆者は2019年と2020年に向け、祭に参加し支えている人たちの数人に聴き取りを実施した³⁰。祭を担う「お党屋本」は、祭の神社である田出宇賀神社と熊野神社の2件のお党屋本がある。お党屋組はどちらにも共通の人たちが担っている。最初に、前年のお党屋本からは「女性の力がないと祭は成り立たない」という話を伺った。祭は男性が前面に出ているイメージが強いが、現代では女性が中心になって祭を支える場面も増えてきている。前年のお党屋組では、伝統に従って女性が裏方を支える場面も多く見られたものの、お党屋本の主人は女性の存在やその力に対し十分な敬意と理解を示していた。去年のお党屋本も今年のお党屋本も、何代にも渡って党本を務めてきた家である。その自負や誇りもあって、古くからの地域の祭をいかにして続けていくかということに強い思いを抱き、その思いを共有している様子が窺えた。今年のお党屋本は普段は公務員をしている。祭に詳しい先代も亡くなっていて、その若い夫妻が取り仕切っている。「祭についてまだまだわからないことも多く、聞くべき人も少なくなっている」と話してくれた。しかし、隣の家の熊野神社のお党屋本夫妻は、こちらも代々お党屋本を務めてきた家である。幸いにもお党屋本の先輩であり、同じく今は亡き両親から受け継いできた祭の伝統やしきたりが、この二人の中に受け継がれていることがわかった。2組のお党屋本が協力し合って、祭の伝統と革新をうまく図ろうとしている。そして祭を支えて成功させたい、継承していきたいという思いを共有しながら、時に前面に出て、時には一歩下がってその準備と行事を円滑に実践しよう

としているのが、お党屋組の様々な人たちである。男性たちは親子2代で参加している人たちも多かった。「若い時には転勤族で町を離れていたのですが、今は祭を通して町に恩返ししたい」と話してくれた男性は、勤務先の東京から長男が帰ってきて一緒に行事に参加していた。郡山市から加わった男性は、「祭は郡山市にもたくさんあるが田島祇園祭の魅力は伝統の継承にある。祭は郷土愛を育てていく」と話していた。現在、お党屋組は約10年に一度というサイクルで廻っている。今年と同じお党屋組に3回、つまり約30年ほど加わってきたという男性は、「中断もあったが祭の行事と継承は楽しいもの。どぶろくの祭³¹という伝統やそれを続けてきた力をどうにか途切れさせないようにしたい」と話していた。2011年の東日本大震災の折にも、議論を重ねた上で田島祇園祭は実施された。その時のお党屋組は2020年の祭を担うお党屋組であった。お党屋本は「震災の年に、こういうときだからこそ祭は行なう意義があるということになった」と話していた。また「かっちりとさせているわけではなくても、みんなで作っていく祭だからどうにかなっていく。構成メンバーも10年前と同じとは限らない、道具ももはやどこにあるのか自分が知らないどころか、道具のある場所を知っている人も少なくなっている。それでもやっていくうちにどうにかなっていく、それが祭だ」とも話した。これは祭の継承と維持を自分たちが体験し、担ってきたことで理解し得た帰結と解釈できる。

祭を担う人たちの声から浮かんできたのは、まず地域の祭の歴史と伝統を途絶えさせたくないという強い思いである。それに加え、可能な限り現代には現代に沿った変容をさせていくことが無理のない、かといって伝統文化の価値を損なうことのない、地域の柔軟な祭の継承の仕方だということである。現代の田島祇園祭を通した祭のつながりからは、歴史や伝統と新しい形の融合、そして地域や年齢、性別を超えた人々の中の緩やかで簡単には壊れないようなしなやかな強さが認められた。そのつながり方の強さと力は800年余の歴史に裏付けられている。祭と祭を通したつながりや絆を支えているのは、これまでのお党屋本やお党屋組の人たちが残した祭の営みと、これから祭という文化資本、それを通したつ

ながりというソーシャル・キャピタルを受け継いでいく次世代の人たちが共有する誠実な思いである。田島祇園祭は、祭を通して新しい共同と連帯の再構築を担い続けている。もちろん祭には、祭に携わる人それぞれの関わり方と様々な捉え方がある。文化としての祭と祭を通したつながりや絆は、必ずしもプラスの効果だけをもつわけではない。祭が嫌いな人も存在し、つながりがマイナスの効果を及ぼす場合があることもまた事実である。

しかしながら世界中のいたるところで人々が生き、社会共同体を構成していく以上、祭という文化資本と祭を通した「つながり、絆」というソーシャル・キャピタルが消滅することは恐らくなく、祭という文化資本とソーシャル・キャピタルの持つプラスの効果は失われることもないだろう。祭が育む「つながり、絆」は、世界中に生きる多様な人々を祭独自のあり方で結び、多元的に支えていくことのできる一つの有力な資本として大きな可能性を有しているといえるのではないだろうか。

6. 結語

日本各地では現在も様々な祭が行なわれている³²。その祭の多くが、長い歴史と伝統的な文化を持ってきた。古い祭には長く継承されてきた伝統的な側面と、時代に即して新たに変容や簡素化が図られることで続いてきた側面の両方が共存していることが認められる。

田島祇園祭は鎌倉時代の文治年間に起源を持ち、800年余り続いてきた祭といわれている。祭には海外からの参加者や観客を魅了するような伝統的な形式や装束などが残り、古く厳しいしきたりや禁忌が形を変えずに守り続けられてきた。一方で簡素化できる行事は簡素化が進み、準備の手順や方法、道具などの多くの点で現代に即した変容が見られる。参加者の一人によると、可能などころで簡素化が進まない伝統文化の祭であればあるほど維持や継承が困難になる、ということであった。農村などでは、人が集まりやすい広い家屋の家では祭のお党屋本を務めることもでき、3世代以上から成る家族構成の家も都市部よりはずっと多い。農業を生業にし、古い時代から代々の土地を守って住み続けてきた人の

割合も高い。このような条件がそろっていることから、都市部の祭礼などよりは伝統的な祭の維持や継承は比較的しやすいといえるかもしれない。しかし祭が大きな規模になればなるほど、時間的にも経済的にも負担は増える。中世の歴史では領主という祭の保護者を失った途端、祭の中断が余儀なくされた経緯があった。祭が始まった当初は、領主が勧請した牛頭天王須佐之男命が祀られた祇園祭の時、同時に農耕に不可欠な「馬」を取引する「馬市」が開かれたとされている。祇園祭と馬市の賑わいは、町をハレの日として盛り立てただろう。次第に領主の寄進と町の人たちの愛着によって「七行器行列」、「神輿渡御」など現在につながる行事が行なわれるようになった。田島祇園祭は、京都祇園祭のように疫病の流行や厄除祈願から始まったものではなかった。領主が勧請した牛頭天王須佐之男命の祭、すなわち祇園(天王)祭が在来の田の神への稲作祈願を主な目的とした農耕祭祀と融合し、独自の展開をみた祭礼であった。現在も祭の時期に特別にお党屋本宅にしつらえられる祭壇には「田島天王祭」という、田島の地名と祇園祭の神である牛頭天王須佐之男命の名前が併記された御神体がみられる。米との関わりも深く、お供えをはじめ献立や神事などの様々な場面で米が用いられる様子が見られた。

大きなイベントや盛り場などが少ない町で、祭は一年に一度の最大のハレの日としても機能してきた。祭は町の人々の日常と密接に関連している。現代では多少様変わりをしているとはいえ、都市部に赴き暮らしている家族が祭の日には帰省し、一堂が会する良い機会になってきた。簡素化と近代化が進んでも、祭は人々を結び付ける役割という普遍性を保持している。親類縁者ばかりではなく、地縁のない人たちも、最近では国を越えて多くの人たちが祭に加わる。それは行列の参加者であったり、カメラを携えた観客であったりする。この町と人が気に入って祭に参加し、以降毎年必ずといっていいほど祭の準備や行事に加わって人や地域との交流を続けている人たちが少なからずいることが認められた。リーチやターナーが明らかにしたように、祭では連続した時間に一定の区切りを入れることで、役割転倒を含めた非日常の時間と空間が生まれる。そのようなあ

いまいでマージナルな時間や空間には普段とは異なる、ある意味で階層を消した対等な人間関係が生まれ、そのことがまた日常に新たな刺激と活力を与える。また、折口信夫（1925）は「まれびと」という概念を用いて、祭とは外から招聘される神（まれびと）と土地の精霊とが交流する儀式だと論じた。祭には、日常とは異なる非日常の時間と空間が演出され、そこにまた外からの参加者が加わることで一定の役割が果たされてきたという。田島祇園祭は「お党屋制度」という祭を担う人たちの制度によってスムーズな運営が行なわれ、伝統文化継承の人的な土壌が培われてきたといえる。町の人々の日常生活と祭と信仰は密接に関連している。お党屋制度自体も、祭の変容に伴って改善や近代化、簡素化が加えられてきた。古い祭の伝統の価値を受け継ぐ必要がある一方で、その維持には一定の困難さもつきまとう。お党屋制度の変容や改善は、祭という伝統的な文化を持続させるために不可欠な人的資源を保持し育成するための、人々の知恵の結果ともいえるだろう。

祭が人々を魅了してやまない要因はいくつか考えられる。中でも祭を通して育まれる人や社会、共同体におけるつながり、絆というソーシャル・キャピタルは、他の文化要素や社会組織にはみられない祭独自の意義と効能を有しているといえる。祭を通じたつながりや絆などの人的な資源は、自然災害からの復興や社会問題等に対処する際、社会的な援助やボランティア活動を提供する大きなエンパワーメントとなる可能性がある。

今後も様々な社会問題、地球規模の自然災害は後を絶たないだろう。古い時代から人類は自分たち人間を超えた大きな力としての神や仏に祈りを捧げ、これを祀り、感謝祈願する祭祀儀礼を行なって生活してきた。祭の目的は地域や時代によって多少の違いは見られても、祭が人類の営みの一部であり、そのためにつながりという資源を育むことができるという点では共通している。このような祭を通じた、あるいは祭に関したつながりが人々の日常にも絆や支えの一部となって機能していることもまた同様である。祭と人々が深く関連して生活を営んできたからこそ、祭が好きな人も嫌いな人もおり、祭には人それぞれの捉え方や関わり方、意味づけが認められ

る。祭と人類が密接なものであり続けてきたために、祭はプラスの作用もマイナスの作用も発揮しうるといえる。個人と個人、個人と社会の間、人間と社会と神の間の「つながり、絆」が育まれることで祭という伝統文化は人々を魅了してやまず、そのような「つながり、絆」がまた魅了される祭を継承していく大きな要素なのではないだろうか。その循環が強固に、一方で時代に即した形でなされてきたことが田島祇園祭の事例から考察された。古い形式と伝統を踏襲しつつも、地域や差異を越えたしなやかで現代的な「つながり、絆」とそのあり方は、田島祇園祭を担ってきた人たちが育んできたしなやかな強さを反映しているとはいえないだろうか。

参考文献リスト

- アルドリッチ, D・P (2015) 石田祐、藤澤由和訳『災害復興時におけるソーシャル・キャピタルの役割と何か—地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房
- 稲葉陽二 (2016) 「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」, 山田浩之編『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房
- 折口信夫 (1925) 「古代生活の研究—常世の国—」『古代研究 I—祭りの発生』中央公論社, 2002 所収
- 神崎宣武 (1991) 『酒の日本文化』角川書店
- 京都祇園祭山鉾連合会 (2018) 「京都祇園祭公式パンフレット」
- 佐野真由子 (2012) 「『人類の無形文化遺産』になった祇園祭—文化は誰のものにされようとしているのか」, シーダー編集委員会『シーダーNo.7』昭和堂
- 澤木正輝 (2018) 『祇園の祇園祭』平凡社
- ターナー (1969) 富倉光雄訳『儀礼の過程』思索社, 1976 所収
- 田島町史編纂委員会 (1976) 『田島町史第 4 巻民俗篇』歴史春秋社
- 田島町史編纂委員会 (1985) 『田島町史第 1 巻通史 I』歴史春秋社
- 田島町教育委員会 (1986) 『田島祇園祭のお党屋行事』歴史春秋社
- トリアンディス, ハリー・C (2002) 神山貴弥、藤原武弘編訳『個人主義と集団主義』北大路書房

永田修一(2003)「機能主義」『文化人類学 20 の理論』弘文堂
 パットナム(1993)河田潤一訳『哲学する民主主義』NTT出版, 2001 所収
 俵木悟(2009)「祭りを見る目と民俗学」『日本の民俗 9 祭りの快楽』吉川弘文館
 柳川啓一(1971)「祭の神学と祭の科学」『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房, 1987 所収
 山田浩之(2016a)「都市祭礼文化の継承と発展」『都市祭礼文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房
 山田浩之(2016b)「新しい共同性を構築する場としての祭り—祇園祭に見る祭縁の実態」『都市祭礼文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房
 吉村作治(2015)「祭りこそ伝えるべき日本の文化だ」『季刊日本の祭』平成二十七年秋号, 株式会社ゆめディア
 リーチ(1961)「時間とつけ鼻」青木保、井上兼行訳『人類学再考』思索社, 1974 所収
 脇田晴子(2016)『中世京都と祇園祭—疫神と都市の生活』吉川弘文館
 渡部康人(2020)『田島祇園祭の歴史』南会津町観光物産協会主催「人に教えたくなる!南会津町のおはなし会」(2020.2 開催資料)

註

¹ 山田浩之(2016a)「都市祭礼文化の継承と発展」『都市祭礼文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房, 221p.
² 佐野真由子(2012)『人類の無形文化遺産』になった祇園祭—文化は誰のものにされようとしているのか, シーダー編集委員会『シーダーNo.7』昭和堂, 16p.
³ 新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、2020年度の京都祇園祭における山鉦巡行は中止となった。いくつかの神事や行事は開催される予定である。(「公益財団法人祇園祭山鉦連合会 HP」www.gionmatsuri.or.jp/ 2020.5.30 閲覧)
 (「朝日新聞 DIGITAL」<http://www.asahi.com/> 2020.5.30 閲覧)
⁴ 山田(2016b)「新しい共同性を構築する場としての祭り—祇園祭に見る祭縁の実態—」『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房, 46p.

⁵ 田島教育委員会(1986)『田島祇園祭お党屋行事』歴史春秋社, 10-11p.

⁶ 南山地方とは、福島県会津地方の南部を指す。この地域に現在の南会津町(旧田島町)が含まれていた(渡部 2020 ほか)。

⁷ 長沼五郎宗政は下野国(栃木県)の豪族、小山政光の次男である。1162 年生まれで、吾妻鏡の記述から推定して 1241 年が没年と考えられる(「田島町史 1」1985, 139p.)。小山氏は関東平野中央部の大領主であった。政光は将軍源頼朝の家臣として活躍し、その子宗政も功績をあげたことから、全国数十か所の領地を賜った。その中に下野国長沼(栃木県真岡市長沼)や陸奥国南山地域があった。宗政は領地の長沼姓を名乗り、南山地方の田島郷(現在の南会津町)に鳴山城を築き、統治した。宗政の本拠地である真岡市でも祇園祭が行なわれている(渡部 2020)。

⁸ 田島町史編纂委員会(1976)『田島町史 4』歴史春秋社, 253p.

⁹ 祇園祭で祀られている「牛頭天王須佐之男命(ごずてんのうすさのおのみこと)は、日本の『古事記』や『日本書紀』などに記述が見られる神の一人。乱暴者で姉の天照大御神が「天の岩戸」を引き起こすほどであったが、神話ではやがて改心し、善神となって活躍を見せる。明治の神仏分離政策までは、奈良時代に伝わった「牛頭天王」との神仏習合がみられた。牛頭天王はインドの僧侶である「祇園精舎」の守護神であり、日本では疫神とみなされてきた。そのために荒くれ者の須佐之男命とこの疫神が習合され、その力を借りて様々な厄災除けや疫病退散が祈願されるようになったといわれる。「祇園祭」、「天王祭」の名はこの神の名に由来する。本稿では以下、牛頭天王須佐之男命と表記するものとする。(田島町史編纂委員会(1976)、澤木(2018)、脇田(2016)、渡部(2020)、京都祇園祭山鉦連合会(2018)など)

¹⁰ 田島町史編纂委員会(1976) 同上, 253p.

¹¹ 田島町史編纂委員会(1985)『田島町史 1』, 359p.

¹² 田島町史編纂委員会(1976) 同上, 255p.

¹³ 田島町史編纂委員会(1976) 同上, 255p.

¹⁴ 脇田晴子(2016)『中世京都と祇園祭—疫神と都市の生活』吉川弘文館, 11p.

¹⁵ 脇田(2016) 同上, 210p.

¹⁶ 脇田(2016) 同上, 211p.

¹⁷ 渡部(2020) 同上

¹⁸ 田島町史編纂委員会(1976) 同上, 264p.

¹⁹ 田島町教育委員会(1986) 同上, 28p.

²⁰ 田島町教育委員会(1986) 同上, 22p.

²¹ 田出宇賀神社宮司所蔵。会津田島祇園祭に展示中。

²² 田島町史編纂委員会(1976) 同上, 258p.

²³ 田島町教育委員会(1986) 同上, 31p.

²⁴ 田島町教育委員会（1986）同上，14p.

²⁵ 田島町史編纂委員会（1976）同上，268p.

²⁶ 田島町史編纂委員会（1976）同上，268p.

²⁷ 田島町史編纂委員会（1976）同上，269p.

²⁸ 2020年度の田島祇園祭は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、大幅に規模を縮小して実施することが決定した。催事の内容の変更は、1981年（昭和56年）に田島祇園祭が国指定重要無形文化財に登録されて以来初めてである（福島民報2020年4月10日版）。この件については、2件のお党屋本夫妻などから、中止にはせず開催するよう早い段階で決定したことを確認した。神事などに限って、少数の関係者のみで実施される予定である。

²⁹ 田島町史編纂委員会（1976）同上，258p.

なお献立の変遷については、2020年のお党屋本の夫人から「代々踏襲すべきところは踏襲して伝わってきた」という話を聴いている。

³⁰ 田島祇園祭でのフィールド調査における聴き取りは、2019年度と2020年度の祭を担当するお党屋本夫妻をはじめ、お党屋組の人たち数十人と、祭の参加者、町の人たちなどに実施した。その中から特にお党屋組の人たちの声と意見を抜粋した。

³¹ 田島祇園祭は、祭の時期だけ特別に醸造が許可された「濁酒（どぶろく）」を奉納し、祭の参加者や参拝客などに振舞われることから「どぶろく祭」という別名も持つ（3章参照）。毎年この特別な濁酒を楽しみに、全国から参拝者が訪れるほどである。酒の出来映えは、天候や濁酒仕込みに携わるメンバーによって大きく変わって来るといふ。この濁酒仕込みにも多くのしきたりがあったが、簡素化が進んでいる。濁酒製造が許可された田出宇賀神社の先代宮司は、これは御神酒であって祭の伝統であるから、その伝統の重みを感じる、という（神崎1991）。筆者が2018年に行なった聴き取りでも、当代宮司は濁酒（どぶろく）というよりは「御神酒」と思っていた、と話していた。

³² 俵木は、日本全国では数えることも不可能なほどの多様な祭が、それぞれの地域や集団によって営まれてきたことを民俗学が明らかにしてきた、としている（俵木2009）。

(Received: June 18, 2020)

(Issued in internet Edition: July 1, 2020)